

【日本昔ばなし】山姥の話

動画リンク: <https://youtu.be/zViX1TpytfM>

今回は日本の昔ばなし、「山姥の話」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「山姥の話」は、とても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「山姥の話」を2つ続けてご紹介します。

山姥と馬子

冬の寒い日でした。馬子の馬吉が、町から大根をたくさん馬につけて、12キロ先の自分の村まで帰って行きました。

馬子とは、馬をひいて人や荷物を運ぶ職業の人のことをいいます。

町を出たのはまだ明るい昼中でしたが、日のみじかい冬のことから、まだ半分も来ないうちに日が暮れかけてきました。

村へ入るまでには山を一つ越さなければなりません。ちょうどその山にかかった時に日が落ちて、夕方のつめたい風がざわざわ吹いてきました。

馬吉は何だかぞくぞくしてきましたが、しかたがないので、心の中に観音さまを祈りながら、一生懸命、馬を追って行きますと、

ちょうど山の途中まで来た時、うしろから、「馬吉、馬吉。」と、とつぜん名前を呼ばれました。

その声を聞くと、馬吉は、襟元から水をかけられたようにぞっとしました。

何でもこの山には山姥が住んでいるという言い伝えが、昔から伝わっていました。

馬吉もさっきから、何だかこんな日に山姥が出るのではないか、と思っていたやさきでしたから、もう呼ばれて振り返る勇気はありません。

何でも返事をしないに限ると思って、だまってすたすた、馬を引いて行きました。ところがどうい
うわけか、気ばかりあせって、馬も自分も思うように進みません。

100メートル進むと、またうしろから、「馬吉、馬吉。」と呼ぶ声が聞こえました。しかも先程よりず
っと声が近くなりました。

馬吉は思わず耳をおさえて、目をつぶって、だまって二、三歩行きかけますと、こんどは耳のそば
で、「馬吉、馬吉。」と呼ばれました。

その声が、あんまり大きかったので、馬吉ははっとして、思わず、「はい。」といいながら、ひょい
とうしろを振り向くと驚きました。

もう2メートルうしろに、ねずみ色のぼろぼろの着物を着て、やせこけて、いやな顔をしたおばあ
さんが、ずっとそこに立っているのです。

そして馬吉の顔を見ると、にたにたと笑って、やせたいやらしい手で、手招きをしました。

馬吉は、「あッ。」といって、そこに立ちすくんでしまいました。

すると、おばあさんは、ずんずんそばへ寄って来て、「馬吉、馬吉。大根をおくれ。」といいました。

馬吉がだまって大根を一本渡しますと、おばあさんは耳までさけているかと思うような大きな、
真っ赤な口を開けて、大根をもりもり食べはじめました。

もりもりかむたんびに、赤い髪の毛が、一本一本逆立ちをしました。

いうまでもなく、それは山姥でした。

山姥はみるみる一本の大根を食べてしまって、また「もう一本。」と手を出しました。

それから二本、三本、四本と、もらっては食べ、とうとう馬の背中にのせた百本あまりの大根を、
残らず食べてしまうと、もうとつぷり日が暮れてしまいました。

ありったけの大根を残らずあげてしまったので、馬吉はうしろも見ずに、馬の口をぐいぐい引
っぱって、駆け出して行こうとしました。

一生懸命かけ出して、やっと100メートルも逃げたころ、山姥は大根を残らず食べてしまって、ま
たどンドン追っかけて来ました。

間もなく追いつくと、こんどは、「馬の足を一本。」といいました。

もう馬吉は生きた心地はしません。しかたがないので、ぶるぶるふるえている馬を山姥にあずけたまま、どんどん、駆け出しました。

するとなぜか、焦っているのと、道が暗いので、よけいあわてて、どこかで道を間違えたようで、いくら駆けても駆けても、里の方へは降りられません。

行けば行くほど山が深くなって、もうどこをどう歩いているのか、まるで知らない山の中の道を、心細くたどって行くばかりでした。

とうとう谷のような所へ出ました。ひょいと見ると、そこに一軒、うちらしいものの形が、夜目にもぼんやり見えました。

何でもいい、とにかく入って、わけを話して、今夜はたのんで泊めてもらおうと思って、とんとん、戸をたたきました。

でも中はしんと静まりかえって、明り一つもれてきません。

ぐずぐずしているうちに、山姥が追っかけて来て、見つけられては大変だと思って、馬吉はかまわず戸をあけて、中へ入りました。

入ってみると、中は戸障子もろくろくない、右を向いても、左を向いても、くもの巣だらけの、ひどいあばら家でした。

「なるほど、これではいくらたたいても返事をしないはずだ。人の住んでいないうちのな。それでもしかたがない。

今夜はそとここにかくれて、夜の明けるのを待つことにしよう。」

と、独り言をいいながら、馬吉はそと上がっていきますと、そこは二階建てで、上は物置のようになっています。

「かくれるにしても、二階の方がいい。」と思って、馬吉は二階に上がって、そとすすだらけな畳の上に横になりました。

横になって、どうかして眠ろうとしましたが、何だか目がさえて眠られません。始終、外の物音ばかりに気を取られて、胸をどきどきさせていました。

すると夜中過ぎになって、しっかりしめておいたはずの表の戸がすうっとあいて、だれかが入って来ました。

「はてな。」と思って、馬吉が二階からそとのぞいてみますと、折からさし込む月の光で、さっきの山姥が、台所のお釜の前に座って、独り言をいっているのが見えました。

「今日は久し振りのごちそうだったなあ。大根も馬もうまかった。馬吉に逃げられなければ、なおよかったのだけれど、残念なことをした。」

馬吉はそれを聞くと、ぶるぶるふるえ上がって、頭をおさえてちぢこまってしまいました。

しばらくすると、山姥は大きな口をあけて、大あくびをして、

「ああ、眠くなった。今夜はどこに寝ようかな。臼の中にしようか。釜の中にしようか。下に寝ようか。そうだ、涼しいから二階に寝よう。」といました。

馬吉は「もうこんどこそ助からない。」と思いました。

「山姥のやつ、おれが上にいるのを知って、上がってきて食べるつもりだろう。ああ、もうどうしようもない。観音さまどうぞお助け下さいまし。」

心の中に念じながら、今にも山姥が上がってくるか、と待っていました。ところが山姥は、なかなか上がってきませんでした。

やがてまた大きなあくびをして、「二階に寝ればねずみがさわぐ。臼の中はくもの巣だらけ。釜の中は温かくて一番いい。そうだ、やっぱり釜の中に寝よう。」

と、独り言をいいながら、大きなお釜のふたを取って、中に入ったかと思うと、やがて眠ってしまいました。

二階からこの様子を見ていた馬吉は、そっと階段を下りました。そしてそっとお庭へ出て、いちばん大きな石を抱え上げて運んで来ました。

そして「うんとこしょ。」と、石をお釜の上ののせて、上から重しをしてしまいました。

お釜の中からは、あいかわらず、ぐうぐう、いびきが聞こえました。

お釜に重しをしてしまうと、こんどはまた、お庭から枯れ枝をたくさん集めて来て、小さく折っては、お釜の下に入れました。

枯れ枝を折る音が、寝ている山姥の耳に聞こえたときみえて、山姥はお釜の中で、

「雨の降る夜は虫が鳴く。ちいちい鳴くのは何虫か。虫よ鳴け鳴け、雨が降る。ぱらぱらぱらぱら、雨が降る。」と歌いました。

山姥が気持ち良さそうに、ぱちぱちいう枯れ枝の音を雨の音だと思って聞いていますと、その間に馬吉は枯れ枝に火をつけました。

お釜のそこがだんだんあつくなってきて、そのうちじりじり焦げてきたので、さすがの山姥もびっくりして、「おお、あつい。」といて飛び上がりました。

ふたを持ち上げてとび出そうとしますが、上から重しがのしかかかっていて、身動きができません。

馬吉はかまわずどんどん枯れ枝を燃やしながら、

「馬喰うばあはどこにいる。寒けりやどンドン焚いてやる。あつけりや火になれ骨になれ。」と歌いました。

とうとうお釜が上まで真っ赤に焼けました。その時には、山姥の体中、火になって、やがて骨ばかりになってしまいました。

山姥と娘

むかしあるところに、お百姓の夫婦がいました。夫婦の間には十歳になるかわいらしい女の子がいました。

ある日、お父さんとお母さんは、野原へお百姓のしごとをしに行く時に、女の子を一人お留守番に残して、

「だれが来ても、けっして戸をあけてはならないよ。」といつけて、鍵をかけて出て行きました。

女の子は一人で残されて、さびしくて心細くてしかたがありませんから、小さくなっていろりにあたっていました。

するとお昼ごろになって、外の戸をとんとん、たたく音がしました。「だあれ。」と、女の子がいました。

「わたしだよ。すぐにあけておくれ。」と、おばあさんらしい声が聞こえました。

「でも、あけてはいけないんだって。お父さんとお母さんがそういったから。」と、女の子はいました。

「何だって。あけてくれなければ、この戸をけ破ってやる。」こういっていきなり戸に手をかけて、みりみり動かしながら、両足でどンドン、けりつけました。

女の子はびっくりして、困って、しかたがないものですから、戸をあけてやりました。

戸をあけると、ぬっと、おそろしい顔をした山姥が入って来て、炉ばたに足をなげ出して、「おお、寒い、寒い。」といました。

「おばあさん、何しに来たの。」と、女の子はたずねました。

「おなかですいた。早く御飯の支度をしろ。」と、山姥はこわい顔をしていつけました。

女の子はぶるぶるふるえながら、台所へ行って、御飯のいっぱい入ったおひつを持って来ました。

山姥はおひつのふたをあけて、手づかみでせつせと御飯をつめこみながら、たくあんをまるごと、もりもりかじっていました。

その間に女の子は、そっとうちから抜け出して、逃げて行きました。

どンドン逃げて行って、山の下まで来ると、御飯を食べてしまった山姥が、いくらさがしても女の子がいないので、大層おこって、

「おうおう。」と、いいながら追っかけて来ました。

ずいぶん一生懸命走りましたが、山姥の足に小さな女の子がかなうはずはありませんから、ずんずん追いつかれて、もう少しで山姥に肩をつかまれそうになりました。

女の子は夢中で一生懸命逃げますと、山の上からしばを背中に背負って下りて来るおじいさんに出あいました。

「おじいさん、おじいさん。山姥が追っかけて来るから助けてください。」と、女の子はいました。

「よし、よし。」といって、背中のしばを下ろして、その中に女の子をかくしました。

すると山姥が追っかけて来て、おじいさんに、女の子はどこへ行ったとたずねました。

おじいさんがわざと、「あそこに。」と言って、向こうに積んであるしばを指さしますと、山姥はいきなりそのしばに抱きつきました。

その芝はちょうど崖の上に立てかけてあったものですから、山姥は自分のからだの重みで、しばを抱えたまま、ころころと谷底へころげ落ちました。

そのすきに女の子はどんどん逃げて行きました。すると山姥は谷底からはい上がって、「おうおう。」といいながら、あとから追っかけて行きました。

女の子がまた一生懸命逃げますと、また一人のおじいさんが、そこでかやを刈っていました。

「おじいさん、おじいさん。山姥が来るから助けてください。」と、女の子がいますと、おじいさんは「よし、よし。」と、刈ってあるかやの中に隠してくれました。

やがて山姥が追っかけて来ますと、おじいさんはわざと向こうの崖の上にあるかやの束を指さしました。

山姥がいきなりかやの束にしがみつきますと、はずみですべて、ころころと谷底にころがりました。

その間に女の子は、またどんどん逃げて行きました。

そのうち、とうとう大きな沼のふちに出ました。やがて山姥も谷底からはい上がって、また追っかけて来ました。

女の子はもうこの先、逃げて行くことができなくなって、沼のふちに立っている大きな木の上に登りました。

すると山姥が追いついて来て、「どこへ行った、どこへ行った。どこまで逃げたって逃がすものか。」

といいながら、きょろきょろそこらを見まわしますと、木の上に登っている女の子の姿が、沼の水にうつりました。

山姥はその水にうつった姿をめぐがけて、沼の中に飛び込みました。

女の子はその間に木の上から飛び下りて、沼の岸の笹をかきわけて、逃げて行きますと、一軒の小屋がありました。

中へ入ると、若い女の人が一人、留守番をしていました。女の子はこの女の人に、山姥に追われて来たことを話して、石の箱の中へかくしてもらいました。

すると間もなく、山姥は沼から上がって、どんどん追いかけて来ました。そして小屋の中に入って来て、「女の子が逃げて来たろう。早く出せ。」と、どなりました。

「だってわたしは知らないよ。」すると山姥は疑い深そうに、鼻を鳴らして、「ふんふん、人くさい、人くさい。」といいました。

「なあに、それはわたしが雀を焼いて食べたからさ。」「そうか。そんなら少し寝かしておくれ。たくさん走って疲れた。」

「おばあさん、寝るのは石の箱にしようか、木の箱にしようか。」「石の箱はつめたいから、木の箱にしようよ。」

こう山姥は行って、木の箱の中に入って寝ました。

山姥が箱の中に入ると、女は外からぴんと錠を下ろしてしまいました。

そして石の箱の中から女の子を出してやって、「山姥を木の箱の中に閉じ込めたから、もう大丈夫だ。」

といって、太い錐を出して、火の中につっ込んで真っ赤に焼きました。

この焼いた錐を木の箱の上からさし込みますと、中で山姥が寝ぼけた声で、「何だ、二十日ねずみか、うるさいぞ。」と、いいました。

その間に女は箱に穴をあけて、ぐらぐら煮え立っているお湯を穴から注ぎ込みますと、

中で、「あつい、あつい。」とさげびながら、山姥はどろどろに煮えくずれてしまいました。

女は山姥をやっつけて、女の子といっしょにうちへ帰りました。この人ももとは山姥にさらわれて、こんな所に来ていたのです。

日本昔ばなし「山姥の話」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

